

# 地質ニュース

地質調査所

NO. 41 1958-1

## 第3回ECAF E地域の鉱産資源開発小委員会 および地質図作製作業部会に出席して

エカフエ……アジア極東経済会議 (ECAF E ;  
Economic Conference for Asia and the Far East)  
工業資源委員会 (Comittee on Industry and Natural

Resources) の鉱産資源  
開発小委員会 (Sub-Co-  
mittee on Mineral Re-  
sources Development)  
の第3回 およびその  
付属の地質図作製作業  
部会 (Working Party  
of Senior Geologists  
on the Preparation of  
Regional Geological  
and Mineral Maps for  
Asia and the Far East)  
の第3回会合が 32年  
11月4日から16日にわ

たつて アフガニスタン オーストラリア ボル  
ネオ ビルマ セイロン 中華民国 フランス  
インド インドネシア 日本 マラヤ オランダ

フィリピン タイ ソ連 西独 米国 英本国の  
各国代表を集めて カルカッタのインド地質調査  
所で開かれた。

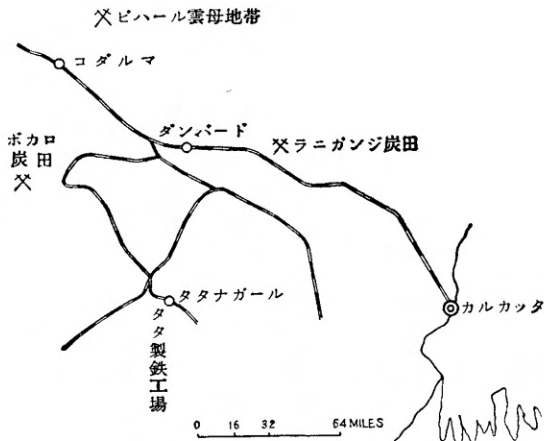


日 本 代 表 団

前列右から 金原部長 西脇三井金属鉱山部長  
後列右から 福田 金子副領事 中沢の各氏

これに参加した日本  
代表は次の通りである。  
東大教授・西尾 滋 通  
産省鉱山局鉱業課長・  
森 五郎 三井金属鉱山  
部長・西脇 親雄 石油  
資源開発酒田鉱業所長  
・中沢 通理 三井鉱山  
地質部・福田 泰三 地  
質調査所燃料部長・金  
原均二の各氏と 他に  
現地からカルカッタ金  
子副領事が随員として  
加わつた。

前半の付属地質図作製作業部会においては か  
ねがね作製中であつたエカフエ地域地質図の最  
終的原稿の検討がなされ また 日本の提案に



E C A F E 見学旅行略図

よつて 地域内鉱産図の作製につき審議が行われた。その他 ソ連およびアメリカの提唱にかかる地質構造図の作製についても討議された。

席上 日本がインドとともに 鉱産図のとりまとめ役に指名されたのは わが国の将来の発展を考えると意義深いことであると思われる。

地質図は本年2月を期して また 鉱産図および地質構造図の作製は その後に完成される予定である。なお エカフエ域内各国における地質調査の進捗状況 地質および地下資源探査の新技术などについても紹介や報告が行われ ともに得るところが少なくなかつた。

次いで開かれた 鉱産資源開発小委員会におい



羽田帰着の金原部長

ては まず前回以降の各地区における鉱業上の発展 新発見などについて 各国からの報告が行われた。

続いて 鉱産物の輸出入 地質および鉱山技術者の訓練 鉱産資源の保全および有効利用 鉱産資源の空中からする探査法 石炭の標準分類 低品位炭の探査開発および利用 鉱業法などに関して各国の報告およびそれに対する討論があり また タイからの提案による石油地質シンポジウムについては 本年末インドで行われることに決定し その内容についての相談が行われた(このシンポジウムに対する各国からの報告書提出期限は本年6月)。

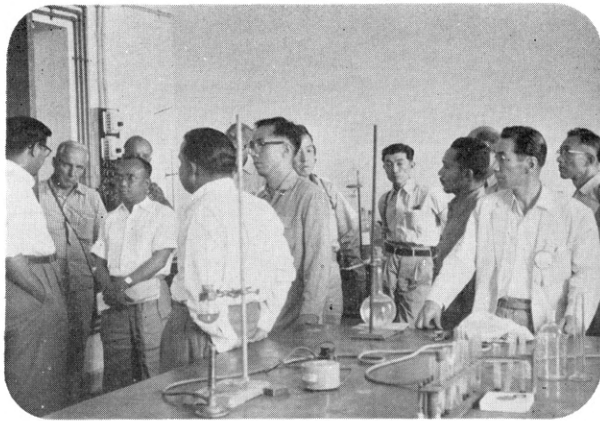
最後に アメリカ代表から エカフエ域内の

地質および鉱山技術者に対して 相互の理解を深め かつ技術向上をはかる目的で 国連の費用によつてカナダへ見学旅行を行う旨の発言があつたが これは一同に異義なく受け入れられた。

会議終了後 カルカッタの西南 150~



地質図作製作業部会に参加した各国代表



燃料研究所見学中の一行(ダンバード)

200 マイル付近にある重要鉱産資源地帯に対する視察旅行が行われ 代表一行はこれに参加した。

見学した個所は 次の通りである。

1. ラニガンジ炭田 (パラデイ採砂場及びメサニ炭鉱)
2. 国立燃料研究所
3. ビハール雲母地帯 (カラクタンビ鉱山 クリスチャン雲母工場 マイカナイト工場)
4. ダモダル河流域 (テイレイヤダム)
5. ボカロ炭田 (炭鉱 発電所 選炭工場 コナルダム)
6. タタ製鉄会社工場 ノアムンデイ鉄山
7. 国立冶金研究所

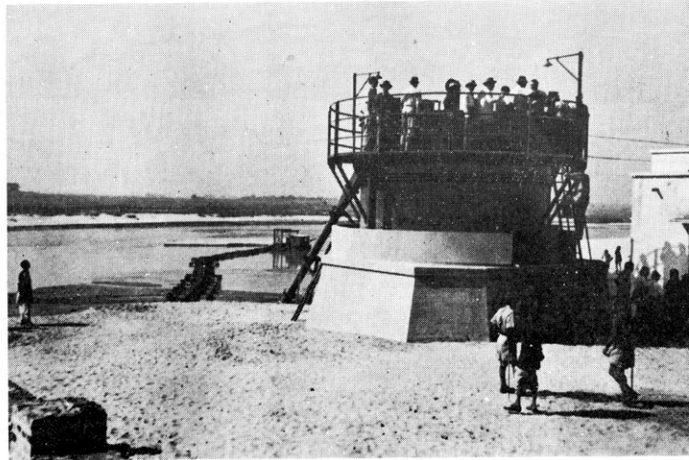
インドの鉱産物の中で 石炭はその大宗であつて 埋蔵量は地下 1,000 フーイト以内で 20 億トンといわれている。

鉄鉱床もその規模および品位において カナダのそれと世界 1,2 を争うほどである。

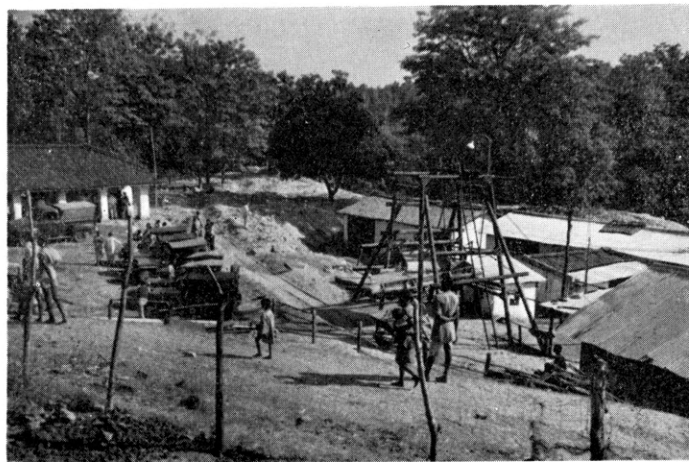
ビハール州ハザリバークに  
作られたテイレイヤダム



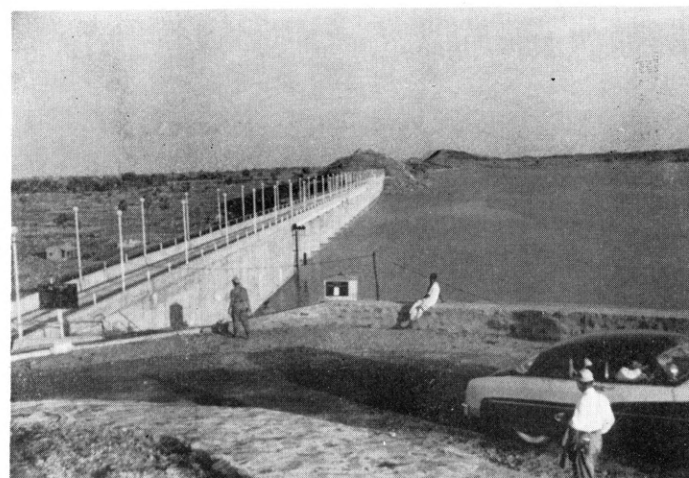
メサニ炭鉱充填用採砂場(パラデイ)

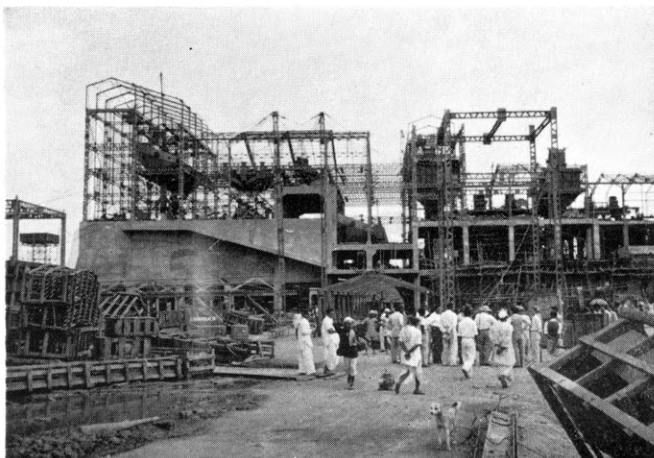


メサニ炭鉱充填用採砂場(パラデイ)



カラクタンビ雲母鉱山





ボカロで建築中の選炭場(日本の輸出による)



ボカロ炭田の露天堀

雲母もその産額において世界の70~80%を占めている。このほかマンガンや窯業原料用鉱物などについても相当の埋蔵量を有し、インドは地下資源においてきわめて恵まれている。しかしその開発利用は、ようやくその緒についたばかりといえよう。

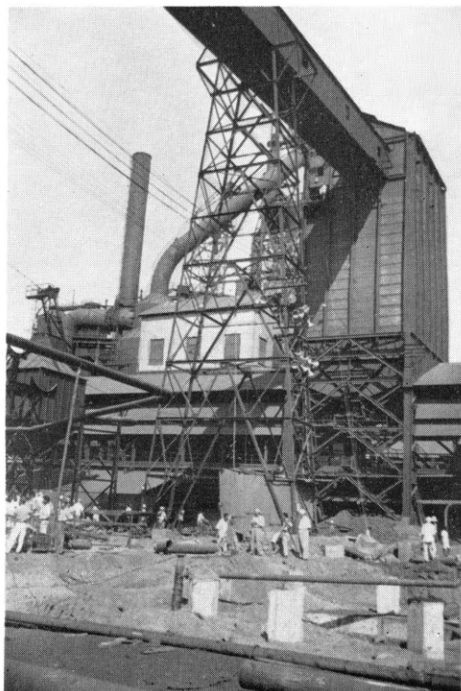
膨大な鉱産資源と、それをとり巻く社会経済の状態をのり目視察して、参加者一同の得たところは少なくなかった。

従つて、地質調査および地下資源探査に従事する者としては、常に広く世界的知見を持つことが要求される。

ここに、今回の会議に参加した各国の技術者は相互に知識を交換し、また諸意見の検討を行つてより深い知識をそなえ得て、各国とも得るところがまことに大きかつたと思われる。

(燃料部長 金原均二)

地質およびその構造の分布連続や、鉱産資源の賦存などの状況は、政治的・地理的境界とは一切何の関係もなく、世界中一連ともいえるのであるから、自国内の地質や地下資源の状況を確実に知るためには、ぜひとも諸外国の知識を必要とする。



タタ製鉄所の一部



国立冶金研究所(タタナガール)